

## 令和8年度第2回袖ヶ浦市文化財審議会

1 開催日 令和8年7月23日（木） 13:30～15:05

2 開催場所 袖ヶ浦市役所北庁舎会議室3-1

### 3 出席委員

|     |       |     |       |
|-----|-------|-----|-------|
| 会 長 | 高橋 克  | 委 員 | 濱名 徳順 |
| 副会長 | 笹生 衛  | 委 員 | 實形 裕介 |
| 委 員 | 成田 篤彦 | 委 員 | 野尻 孝明 |

（欠席委員）

|     |      |  |  |
|-----|------|--|--|
| 委 員 | 井口 崇 |  |  |
|-----|------|--|--|

### 4 出席職員

|        |       |              |        |
|--------|-------|--------------|--------|
| 教育長    | 鴫田 道雄 | 学芸員          | 助川 諒   |
| 生涯学習課長 | 西原 崇浩 | 主任主事         | 依知川 清楓 |
| 副課長    | 田中 大介 | 郷土博物館<br>副主幹 | 前田 雅之  |

### 5 傍聴定員と傍聴人数

|      |     |
|------|-----|
| 傍聴定員 | 5 人 |
| 傍聴人数 | 0 人 |

### 6 議題

- （1）市指定文化財「率土神社縁起」の再検討について
- （2）指定文化財候補について（蔵波八幡神社本殿、密蔵院仏像）

### 7 報告

- （1）国史跡山野貝塚の整備について

## 8 議事等

議題（１）市指定文化財「率土神社縁起」の再検討について

「率土神社縁起」原本確認

翻刻修正

別冊資料 P2 13 行目 上から 7 文字目 絲 → 糸

P3 7 行目 上から 2 文字目 互 → 尔

P3 14 行目 上から 4 文字目 □の中 音カ

紙継ぎ箇所 8 箇所

笹生副会長： 全体のモチーフが非常に興味深い。素戔鳴尊が重要な役割をしており、盤古、日本書紀に出てくる巨人のことであるが、この 2 つが関りを持っている。南北朝から室町時代に成立したとされる『簠簠内伝』は、牛頭天王をベースに話が展開するが、その中に盤古王が出てくる。卜部兼方選の『釈日本紀』に牛頭天王が素戔鳴であるという解釈が 13 世紀には出てきている。それを受けて、『簠簠内伝』は、牛頭天王と妻の頗梨采女、八王子、率土神社縁起は一人少ないが、そのような設定となっている。率土神社縁起の最初のところは、『簠簠内伝』の祇園の牛頭天王信仰と卜部家の『釈日本紀』の解釈などをゴッソリ煮して書かれている。また、『簠簠内伝』の影響が非常に強いので、この書物が陰陽師の暦の注釈書であることから、そのような人たちも関わっていると考えられる。

翻刻 1 頁 13 行目から 2 頁 1～2 行目の記述は、延喜式の祝詞をそのまま写している。

翻刻 2 頁 6 行目、元正天皇の時代という設定が面白く、兵庫県の神社の由来を書いた『峯相記』において、祇園社の大元となる廣峯神社に関する記述の中で元正天皇の時代に言及しており、それと関わっている。

それと連動して、翻刻 2 頁 6～7 行目に「盤古葦原播州飾磨郡に着く由」という記述について、15 世紀に吉田兼俱が編さんした『二十二社註式』に、「牛頭天王。初めは播磨国の明石浦に垂迹し、後に同国広峯に遷る」という記述があり、この部分を下書きにしているのではないか。

翻刻 6 頁目 18 行目に出てくる天平二年は聖武天皇の時代で、『峯相記』で牛

頭天王の廣峯社に関する時代は、基本的には、元正天皇と聖武天皇の時代設定となっているので、このあたりが下書きになっているのではないかな。

翻刻 7 頁目 12 行目の率土明神埴安尊は埴安神を表しているが、日本書紀の神名を把握してそのまま使っているのでは、単純に神仏習合の話だけではなくて、神道的に素養がある人が関わっていたのではないかな。

私の資料の 2 頁目の全体構成について、前半は祇園牛頭天王信仰に基づく盤古王の渡来伝承で、この根っこにあるのが『簠簋内傳金烏玉兔集』で、後半は神納の地名や率土神社の祭祀の由来、祭祀に関わる有力な氏子の由来の地元ネタが書かれている。特に前半は、室町時代に広く流布した暦の注釈書である、陰陽師の人たちがネタ本にした『簠簋内傳金烏玉兔集』、これは安倍晴明がつくったと言われているが、14 世紀に成立したものである、これをベースにし、もう一つ使っているのが、吉田兼俱が著した『二十二社註式』の祇園社の伝承、その他、素戔嗚と牛頭天王を結び付けた『釈日本紀』の内容が入っていると考えられる。

縁起の性格としては、祇園牛頭天王信仰を基礎としながら、室町時代に成立した吉田神道説の影響が認められる。特に日本書紀の神名や大祓のフレーズの引用からは、単純な神仏習合信仰の産物として評価するだけではなく、吉田神道など一定の中世神道説の影響を読み取る必要がある。

縁起の内容のみで簡単には判断できないが、15 世紀後半の『二十二社註式』の影響を考慮すると、断言はできないが遡っても 16 世紀代の成立ではないかな。

縁起の意義は、南関東は天王社が多いと思われるが、南関東における天王信仰の受容プロセスを示す事例として重要である。また、神納や飯富という地域の地名、祭祀の由来、そこに実際に参加する人たちの由来を書いている可能性があるのでは、袖ヶ浦市にとっては非常に重要である。特に、市で現在進めている祭礼の保存とリンクさせていくことも考える必要がある。

もう一つ、景観的に面白いのが、最後のページに後の宮が亡くなった後に、遺骸を石室に納めるや廟室を守り奉るなど埋葬に関わる話が出てくるが、これらは率土神社の境内景観に関わっていて、そこにある古墳や神社などの景観を読み込んでいる可能性を考える必要がある。

現在に残っている景観、祭礼、地名が関わっていて、それが中央とのつながりの中で語られているというところは非常に面白い。

高橋会長：何か意見のある方は。出典が異なる井口委員の意見書もあるが、笹生委員の内容とまとめて一つにしようとするものではない。事務局はどのように考えているのか。

事務局：案内板の板面が見えなくなっているので、内容を修正したうえで修繕したいというところから議題に挙げさせていただいたが、資料自体の内容についていろいろなご意見をいただいた。今回の資料の3ページに示した当初の指定理由は、「古代の袖ヶ浦における歴史的環境を示すものとして、貴重である。」という漠然としたものであり、指定理由に肉付けをした方がよいと考えているがいかかがか。

高橋会長：指定物件の解釈の追加をすることになるかと思う。笹生委員と井口委員の意見についてはいただいておいて、今後この縁起を説明するにあたって、説明する箇所が増えた、重要な箇所が増えたということで、それを追加していくということになると思う。笹生委員の資料の2ページ目の(4)において縁起の意義が示されているが、説明するときこのようなことを追加していくことになるのではないか。

笹生副会長：物語として入れておく必要があるのは、地元の情報が入っており、袖ヶ浦市として大事である。飢富と言っていたのが飯富になったことや多田さんという名前など自分たちに関わる名前が書かれていて、江戸初期の段階もしくは室町時代末期にはこのような伝承があったということが、400年前の歴史として語られている。地元の解釈ということが重要になってくる。袖ヶ浦市の指定文化財なので、なぜ飯富になったのか、なぜ神納になったのかという地名の由来を明確に示す資料と言い切ってもいいと思う。江戸初期と判断した根拠はあるのか。実形委員はいかかがか。

実形委員：漠然とだが、成立してから写された期間を考えてということと思われる。

笹生副会長：江戸初期でも矛盾はないか。

実形委員：矛盾はない。虫に食われているがよくこれだけ残っていた。書かれている内容は読み上げられて神納で共有されてきたものである。井口委員が作成された資料に書かれたような神納の由来もあるが、諸説ある中で、この縁起に書

かれた内容は神社の縁起なので、神宝の鏡を納めたところというのはわかりやすい。成立時期の認識や解釈が多分に反映されていると思われる。中世の諸々の出典を、書いた人が消化しながらここに落とし込んでいると思われる。文字については書いている人の問題もあって複雑になっている。いろいろな出典がある中で、漢文にして書き起こしている。後から振り仮名と送り仮名を書き込んでいきながら、中身がわかるように伝えていくことが引き継がれているということが大事である。

笹生副会長：紙継して書いている。

實形委員：最初に漢文の原文を書いて、どうやって読むのかということになり、振り仮名と送り仮名を入れると読めるようになる。

笹生副会長：面白いのは、最後の「縁起 𠄎 (おわんぬ)」のところでぴったり切っている。奥書にまずいことが書いてあって切ってしまったのではないか。

實形委員：きれいにちぎられている。何かしら書いてあったようには見える。

笹生副会長：意図を感じる。残しておきたくない文字があったのかもしれない。

事務局：いろいろとご意見をいただきましたので、指定理由を肉付けする内容をこちらでまとめて、その内容を委員会で検討いただくということでよいか。

野尻委員：指定理由を変えるのか。

笹生副会長：説明文の内容を変えるならよいのではないか。

事務局：それでは、指定理由は指定当時のものなので変えず、当初議題に挙げていた案内板の内容について、まだ修正して貼り直していないので、今回いただいた意見を踏まえて内容を修正して、委員会で検討いただくということでよいか。

高橋会長：元々説明板の話であった。最終的に説明板に記載する内容で提示してもらえばよい。

事務局：承知した。

高橋会長：笹生委員には引き続きアドバイスをお願いしたい。

笹生副会長：井口委員とも話をして、まとまった文章にしてもよいと考えている。

事務局：まとまった文章というのは何かに掲載するということか。

笹生副会長：市史研究はどうか。

事務局：ぜひ書いていただきたいと考えていた。また、郷土博物館の袖ヶ浦学で市民

の方に公表していただいてもよいのかと考えていた。まずは文章化していただく方が形として残るので一番良い。

議題（２）指定文化財候補について（蔵波八幡神社本殿、密蔵院仏像）

事務局：資料に沿って説明

高橋会長：まずは蔵波八幡神社本殿について、野尻委員にお願いしたい。

野尻委員：資料５ページの１行目に「補材」とあるが「当初材」である。オリジナルの材料がほとんどなく大方取り替わっているように見えた。この神社の話は前年度の最後の会議で出てきたもので、平成６年刊行の『袖ヶ浦の建造物』において、１６世紀に遡る可能性がある建物として、蔵波八幡神社を含めて注目案件として３件リストアップされている。その後十数年経って、諏訪神社が県指定となっているが、それ以外に指定となっておらず、目立った成果はない。天正年間建築を肯定する積極的な要素は見当たらないとあるが、渦とか若葉といった絵様が全然なく、海老虹梁も全くのっぺらぼうで、他でこのような事例を見たことがない。海老虹梁の材料もあまりよくない。『袖ヶ浦の建造物』ではそういったところも中世的な要素の一つとしてみられると言っておられて、他にも蟄股や木鼻、向拝は材料は新しいものが多いが、古い要素が見られるとして、３０年以上前からリストアップされている。最近では、例えば放射性炭素年代測定や年輪年代測定の技術があるので、何か新しい情報が得られれば、それを契機として指定ということがあってもよいのではないかと。最初は地元の方が指定に熱心という話も聞いていたので、良い方向に進めばよいと考えていたが、現在は地元の意向を確認中とのことである。いずれにしても、材料は変わっているが、傷みが激しく、こんなに傷んでいるのであれば建替えてしまおうというようにはしたくない。指定されるからしっかり修理して新しい材料に変えてしまおうとなってしまうのも困るので、丁寧に対応したいと考えている。

高橋会長：ありがとうございます。他に意見はあるか。

事務局：お話にあった年輪年代測定は非破壊でできるのか、またどの部分が適当なのか。

野尻委員：年輪年代は非破壊でできる。なるべく周辺の樹皮に近いところを含んだ部分

の一定幅の写真をとれば推定できると思われる。放射性炭素年代の方は何箇所か測定しなければならないが、耳かき一杯分は削らないといけない。

笹生副会長：グラフに合わせなければならないので、年輪もかなり幅が必要となる。放射性炭素年代は、AMS という精度の高い測定方法があるが、一箇所だけでは難しいかもしれない。

高橋会長：建造物は年代が確定してこないとどうにもならない。伝わってきたことを証明できるものをどれだけ集められるか。移築の墨書があるとか。

濱名委員：先日短い時間見ただけであるが、『袖ヶ浦の建造物』にある内容に少し疑問があると感じた。せっかく野尻委員がいらっしゃるので、もう一度詳しい調査をしていただいて、内容を再検討するのはいかがか。

笹生副会長：古材は少ないが、造りとしては古いものもあるというご意見があり、それはそれで大事である。これからはそういうものも大事にしていく必要がある。古いものを部分的に変えながら残していき、結果としてあのような形になったということではないか。それはそれで意味がある。濱名委員がおっしゃったように、野尻委員に見ていただいて判断するのがよいのではないか。指定する、しないは別として、所有者の方にこの建物にはこのような意味があるということを伝えて、だからしっかり管理してほしいということを伝えた方がよい。

高橋会長：事務局はそのようなことでよいか。

事務局：野尻委員のご都合がつけば神社と調整したい。

野尻委員：もう少し時間をもらえれば少しはわかるかもしれない。

高橋会長：日程調整をして、再度野尻委員に調査してもらうということをお願いしたい。

次は密蔵院の仏像ということで、濱名委員にコメントをいただいてもよいか。

濱名委員：密蔵院の阿弥陀如来坐像ですが、『袖ヶ浦の仏像・仏具』では鎌倉末との評価が与えられていたが、この間見せていただいたところでは、まず平安中期、10 世紀まで遡るお像になる。上がっても 11 世紀代というのは下つても誤りかと思うが、11 世紀代ということはない。おそらく 10 世紀代だろうと思う。昭和 44 年に修復されたということであるが、てかてかに修復されており、像容を損ねているところであるが、基本的には本体に関してはそれほど後の手が加わっていることはないような気がしている。詳しい調査をしてみない

とわからないが、おそらく頭体幹部、脚部などは当初の部材が残っているような気がする。非常に古い時期の重要なお像と思われる。よく似たものとしては、隣の木更津市の長楽寺にある薬師如来坐像があって、同じ時期のものと思っている。県指定であり、木彫の仏像としては県内ではその辺りが一番古い。それ以前に遡るものとしてはほんの1、2体ぐらいではないか。現代の木造の仏像彫刻としてはこの辺が一番古いと思われるので、しっかり調査をして今後指定の方向へ進めていければと思う。

笹生副会長：密蔵院は古い寺なのか。中世の石塔があった。

濱名委員：ちなみに、『袖ヶ浦の仏像・仏具』では、玉眼、金箔とあるが、彫眼、漆箔であらう。

高橋会長：説明にあったように、指定候補として調査する方向で事務局はよろしいか。

事務局：承知しました。

高橋会長：阿弥陀堂の仏像はいかがか。

濱名委員：密蔵院のように古い時期のお像ではなく、文化財的な価値から言うとさほど重要性のあるものではないと思われる。全体的に見ると化政期くらいのお像であろうか。その時期になるとこのようなお像が増えてくる。こちらについては改めて調査する必要はどうかというところである。

#### 報告（1）国史跡山野貝塚の整備について

事務局：資料に沿って説明。

質疑等特になし。

以上

# 令和 8 年度 第 2 回袖ヶ浦市文化財審議会

## 会議次第

日 時 令和 8 年 7 月 2 3 日 (木)

午後 1 時 3 0 分から

場 所 袖ヶ浦市役所 3 - 1 会議室

### 1 開会のことば

### 2 会長あいさつ

### 3 教育長あいさつ

### 4 議題

( 1 ) 市指定文化財「率土神社縁起」の再検討について

( 2 ) 指定文化財候補について ( 蔵波八幡神社本殿、密蔵院仏像 )

### 5 報告

( 1 ) 国史跡山野貝塚の整備について

### 6 閉会のことば



## **令和 8 年度 第 2 回袖ヶ浦市文化財審議会資料**

## 目 次

|                                  |   |
|----------------------------------|---|
| 指定文化財及び市文化財審議会にかかる根拠法令・・・・・・・・・・ | 1 |
| 第26期袖ヶ浦市文化財審議会委員名簿・・・・・・・・・・     | 2 |

### 次第4 議 題

|                                   |   |
|-----------------------------------|---|
| （1）市指定文化財「率土神社縁起」の再検討について・・・・・・・・ | 3 |
| （2）指定文化財候補について（蔵波八幡神社本殿、密蔵院仏像）・・  | 4 |

### 次第5 報 告

|                             |   |
|-----------------------------|---|
| （1）国史跡山野貝塚の整備について・・・・・・・・・・ | 7 |
|-----------------------------|---|

## 指定文化財及び市文化財審議会にかかる根拠法令 袖ヶ浦市文化財の保護に関する条例より抜粋

### 第2章 市指定文化財

(指定)

第4条 教育委員会は、市の区域内に存する文化財のうち重要なものを袖ヶ浦市指定文化財（以下「指定文化財」という。）に指定することができる。

2 前項の規定による指定をするには、教育委員会はあらかじめ指定しようとする文化財の所有者、保持者又は権原に基づく占有者（以下「所有者等」という。）の同意を得なければならない。ただし、当該文化財の所有者等が判明しない場合は、この限りでない。

3 第1項の規定により指定をするときは、教育委員会はあらかじめ第24条の規定により設置する袖ヶ浦市文化財審議会（以下「審議会」という。）に諮問しなければならない。

4 第1項の規定による指定は、その旨を告示するとともに当該文化財の所有者等に通知して行う。

5 第1項の規定による指定は、前項の規定による告示があった日からその効力を生ずる。

6 第1項の規定により指定をしたときは、教育委員会は、当該指定文化財の所有者等に指定書を交付しなければならない。

### 第4章 市文化財審議会

(設置)

第24条 文化財の保存及び活用に関し、教育委員会の諮問に答え、又は意見を具申し及びこれらに必要な調査研究を行うため袖ヶ浦市文化財審議会を置く。

(定数及び委嘱)

第25条 審議会は、非常勤の委員7名で組織し、文化財に関する学識経験者のうちから教育委員会が委嘱する。

(任期)

第26条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 委員が欠けた場合における補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長及び副会長)

第27条 審議会に会長及び副会長各1名を置く。

2 会長及び副会長は、委員の互選により定める。

3 会長は、会務を総理し、審議会を代表する。

4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

## 第 2 6 期 袖ヶ浦市文化財審議会委員名簿

| 氏 名                 | 担当分野       | 備考           |
|---------------------|------------|--------------|
| さそう まもる<br>笹生 衛     | 有 形<br>記念物 | 再 任<br>7 期目  |
| じつかた ゆうすけ<br>實形 裕介  | 有 形        | 再 任<br>2 期目  |
| たかはし まさる<br>高橋 克    | 民 俗        | 再 任<br>10 期目 |
| なりた あつひこ<br>成田 篤彦   | 記念物        | 再 任<br>10 期目 |
| のじり たかあき<br>野尻 孝明   | 有 形        | 再 任<br>2 期目  |
| はまな とくじゅん<br>濱名 徳 順 | 有 形        | 再 任<br>3 期目  |
| いぐち たかし<br>井口 崇     | 有 形        | 新 任<br>1 期目  |

任期 令和 7 年 4 月 1 日から令和 9 年 3 月 3 1 日まで

## 議題（１）市指定文化財「率土神社縁起」の再検討について

令和８年５月２８日に開催しました令和８年度第１回文化財審議会におきまして、市指定文化財「率土神社縁起」の再検討の必要性についてご意見をいただきました。

つきましては、「率土神社縁起」原本をご覧いただき、意見を求めるものです。

### １ 率土神社縁起の概要

指定年月日：平成２年１月２４日

指 定 番 号：袖文指第１５号

種 別：有形文化財 古文書

所 在 地：袖ヶ浦市下新田１１３３番地（袖ヶ浦市郷土博物館）

※元々の所在地は率土神社。寄託により郷土博物館で保管。

所 有 者：個人

時 代：江戸時代初期（写本）

原本は室町時代に書かれたものと推測される。

寸法構造等：縦２８cm、横２００cm、卷子１巻

表紙外 仙斎茶地網目地紋蔓牡丹緞子

表紙内 金銀切箔野毛振楮紙

肌裏 染付楮紙

中軸 杉木軸

軸首 黒檀地印可軸

納箱 桐地 太巻仕様印籠形仕立

指 定 理 由：古代の袖ヶ浦における歴史的環境を示すものとして、貴重である。

経 過：平成１８年 修復保存処理

平成１９年 袖ヶ浦市郷土博物館に寄託

※原本は会議当日にご覧いただきます。

事前に原本を撮影した写真を打ち出した資料をお送りいたしますので、ご確認をお願いいたします（別冊資料参照）。

## 議題(2) 指定文化財候補について(蔵波八幡神社本殿、密蔵院仏像)

令和8年5月28日に開催しました令和8年度第1回文化財審議会の現地視察におきまして、市内蔵波に所在する蔵波八幡神社本殿及び密蔵院と阿弥陀堂の仏像をご覧いただき、ご意見をいただきました。

つきましては、いただいたご意見をまとめましたので、今後の指定の必要性等についてご意見を伺うものです。

### 1 蔵波八幡神社本殿

#### (1) 概要

##### 2 八幡神社

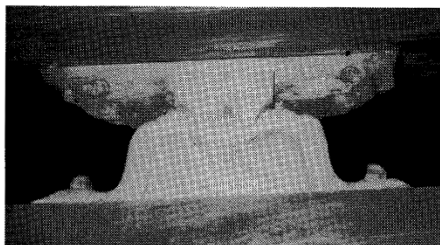
蔵波49

**沿革** 社伝によると、応永2年(1395)に京都の石清水八幡宮を勧請し、天正8年(1580)8月に現在地に再建したといわれる。

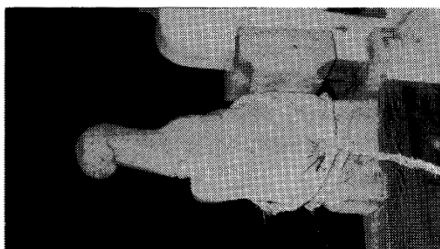
**社殿の構成と建設年代** 本殿は瓦葺・切妻造の覆屋のなかに建つ三間社流造で、屋根は板張である。覆屋は大震災後の再建と推定され、拝殿は昭和49年の再建である。しかし、本殿そのものは、次に述べるように様式が中世末期の特色を示し、伝承のいう天正8年頃の時期の建設と考えられる。ただし、18世紀後期に大修理を行っており、このときに部材の多くを取り替え、墓股や木鼻のような装飾的部材はもとの部材の形を模して作っている。大震災でも被害を受け、屋根、懸魚、高欄等を新材に取り替えている。

**建築様式の特色** 本殿で中世末期らしい特色を示すのは、①身舎と向拝をつなぐ海老虹梁のなだらかな曲線状の形、②墓股の杵の肩が張り、また全体の背が高いこと、③向拝頭貫木鼻の象鼻の素朴な形、④身舎の実肘木が桁から作り出した通し肘木になっていることである。しかし、これらの部材は、いずれも

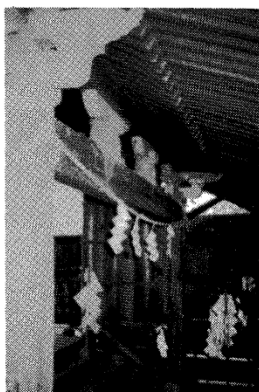
江戸時代のもものと判断され、また墓股の工作は、中世の作である永地の諏訪神社(No.1)のものに比べると、ていねいなものではなく、後世の模作と判断される。



③向拝の墓股



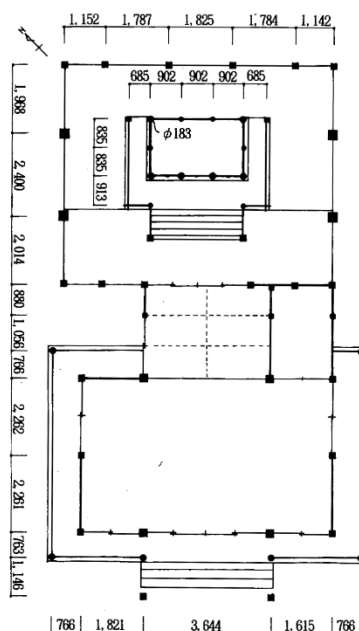
④向拝の木鼻の象の彫刻



①本殿の向拝正面



②本殿の側面



⑤平面図

## (2) 現地見学時の評価等

- ・移築や大規模修繕の経歴があり、補材の残存がよくないように見える。
- ・伝承にある天正年間建築を肯定する積極的な要素は見当たらないが、否定する要素も見当たらない。

## 2 密蔵院の仏像

### (1) 概要



鎌倉末  
木造  
像高 四六・〇  
玉眼  
金箔  
阿弥陀如来坐像  
一軀  
61

袖ヶ浦市教育委員会 1995  
『袖ヶ浦の仏像・仏具』

## (2) 現地見学時の評価等



視察当日撮影した写真

- ・昭和44年に修復(住職からの聞き取り)。
- ・制作年代は10世紀代か。上がっても11世紀代。
- ・手は後補であるが、頭体幹部は一木造。
- ・耳がそっている。
- ・頭の境が不明瞭。
- ・眉間がせまい。
- ・西域の雰囲気が残っている。

### 3 阿弥陀堂の仏像

仏像3体（阿弥陀如来坐像、大日如来坐像、弘法大師坐像）

○阿弥陀如来像について

- ・制作年代は江戸時代の可能性
- ・像底の形が平らであり、江戸の特徴を示している。
- ・小さく、軽い。ヒノキ製と思われる。



大日如来坐像



阿弥陀如来坐像



弘法大師坐像

視察当日撮影した写真

## 報告（１）国史跡山野貝塚の整備について

令和８年度に実施する山野貝塚の整備内容と事業内容について報告するものです。

### ○山野貝塚の整備について

山野貝塚の保存活用において、史跡の一部が適切に保存できていないこと、現地で史跡の内容が把握できないこと、除草作業等の維持管理に多大な費用と労力がかかること、という課題を解決するために、現地の整備を行います。

整備は、令和５年度に策定した『史跡山野貝塚整備基本計画』に基づき作成した設計により行います。

整備は令和８年度から１０年度にかけての実施を計画しており、各年度の整備内容は以下のとおりです（図面参照）。

#### 令和８年度

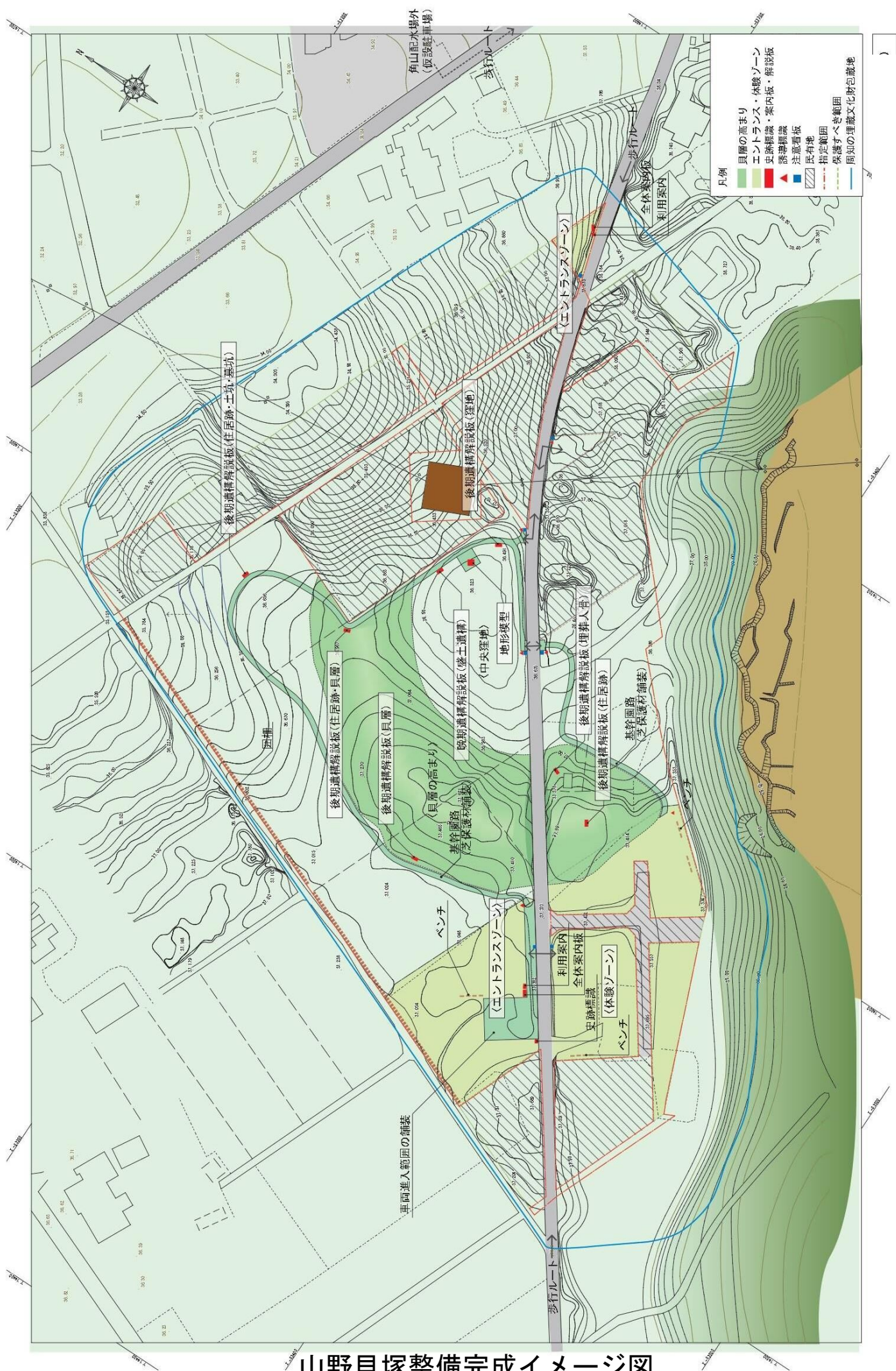
エントランスゾーンの造成（盛土・芝張り・管理車両駐車用芝保護材の設置）、  
史跡標識の設置、囲柵の設置、高まり部分以外の不陸の整地

#### 令和９年度

高まり部分の盛土、樹木植栽

#### 令和１０年度

体験ゾーンの造成（盛土・芝張り）、園路舗装、解説板、地形模型等の設置、  
遺跡保護のための盛土



山野貝塚整備完成イメージ図

## 令和 8 年度山野貝塚保存活用事業について

| 種別 | 項目                | 内容                                       | 実施時期                                                           | 備考                                             |
|----|-------------------|------------------------------------------|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|
| 保存 | 用地取得              | 共有地の持分購入予定                               | 通年                                                             |                                                |
|    | 維持管理              | 除草委託                                     | 6 月～12 月                                                       | 除草：3 回/年<br>集草：1 回/年                           |
|    |                   | ボランティアとの除草                               | 春から夏                                                           | 月 1 回程度                                        |
| 活用 | 見学会、<br>体験会等      | 郷土博物館ミュージアム<br>フェスティバルにおける<br>貝輪づくり体験    | 6 月 6、7 日【済】                                                   | 参加者：297 人                                      |
|    |                   | J R 駅からハイキングで<br>の山野貝塚現地説明               | 6 月 13、14 日【済】                                                 | 参加者：160 人                                      |
|    |                   | 県民の日中央行事におけ<br>る貝輪づくり体験                  | 6 月 14 日【済】                                                    | 参加者：250 人                                      |
|    |                   | 山野貝塚現地見学会「盤洲<br>干潟と山野貝塚でイボキ<br>サゴを観察しよう」 | 7 月 12 日【済】                                                    | 参加者：20 人                                       |
|    |                   | 山野貝塚縄文食体験会「山<br>野貝塚で縄文鍋を作って<br>食べよう      | 12 月 5 日                                                       | 20 名程度募集予定                                     |
|    | 講演会               | 山野貝塚講演会                                  | 令和 9 年 2 月頃                                                    |                                                |
| 整備 | 史跡山野貝塚整<br>備活用委員会 | 実施設計の検討、整備工事<br>の確認、活用事業の検討等             | 第 1 回：7 月 31 日<br>第 2 回：10 月 26 日<br>第 3 回：<br>令和 9 年 1 月 13 日 | 年 3 回の開催を予<br>定                                |
| 運営 | ボランティア活<br>動      | ボランティア研修会等の<br>実施、<br>環境整備、イベント補助        | 通年                                                             | R8.7.1 現在のボラ<br>ンティア数 26 人<br>※今年度 3 名新規<br>応募 |

別冊資料

率土神社縁起

多<sup>オムクノ</sup> 家<sup>カ</sup> 盤<sup>ハ</sup> 請<sup>ウレ</sup>   等<sup>ラ</sup> 令<sup>シメヨトテ</sup> 召<sup>メシ</sup> 依<sup>ヨツテ</sup> 常<sup>トコ</sup> 然<sup>ルニ</sup> 后<sup>コウ</sup> 竺<sup>チク</sup> 斯<sup>コトニ</sup>  
 家<sup>カ</sup> 臣<sup>シン</sup> 古<sup>コ</sup> 祠<sup>コトラ</sup> 盤<sup>ハ</sup> 撓<sup>ハライ</sup> 而<sup>テ</sup> 之<sup>コレニ</sup> 惡<sup>サガナク</sup> 盤<sup>ハ</sup> 宮<sup>ウニテ</sup> 摩<sup>マ</sup> 坦<sup>ハニ</sup> 緣<sup>エ</sup>  
 子<sup>子ラ</sup> 大<sup>ヲノ</sup> 皇<sup>カウ</sup> 既<sup>スデニ</sup> 古<sup>ヲ</sup> 平<sup>ムゲ</sup> 曰<sup>イワク</sup> 隣<sup>リン</sup> 御<sup>ミ</sup>   古<sup>ゴ</sup> 御<sup>ミ</sup> 伽<sup>カ</sup> 安<sup>ヤスノ</sup> 起<sup>キ</sup>  
 載<sup>ノセニ</sup> 朝<sup>アツ</sup> 后<sup>コウ</sup> 以<sup>モツテ</sup> 可<sup>ヘシ</sup> 仰<sup>ヲウセ</sup> 盤<sup>ハ</sup> 州<sup>シュウ</sup> 居<sup>マス</sup> 素<sup>ソ</sup> 居<sup>マス</sup> 陀<sup>ダ</sup> 緣<sup>エ</sup>  
 御<sup>ミ</sup> 臣<sup>シン</sup> 七<sup>チ</sup> 桑<sup>ソウ</sup> 漂<sup>ヒヤウ</sup> 荒<sup>アラ</sup> 古<sup>コ</sup> 之<sup>ノ</sup> 故<sup>コト</sup> 戈<sup>サ</sup> 諱<sup>ミ</sup> 國<sup>コク</sup> 起<sup>キ</sup>  
 船<sup>フネニ</sup> 清<sup>キヨ</sup> 大<sup>タイ</sup> 造<sup>ツクリ</sup> 流<sup>ル</sup> 振<sup>フル</sup> 吾<sup>ワレニ</sup> 帝<sup>テイ</sup> 吾<sup>アガ</sup> 鳴<sup>ヲ</sup> 天<sup>テン</sup> 盤<sup>ハ</sup> 原<sup>タツ子</sup>  
 舳<sup>トモ</sup> 麻<sup>マ</sup> 子<sup>シ</sup> 新<sup>ニワナイノ</sup> 曰<sup>ノフ</sup> 家<sup>カ</sup> 不<sup>レ</sup>   家<sup>カ</sup>   國<sup>クニ</sup> 産<sup>ムス</sup> 豐<sup>トヨ</sup> 媛<sup>メ</sup> 古<sup>コ</sup> 視<sup>ミルニ</sup>  
 繩<sup>ツ子</sup> 呂<sup>ロ</sup> 并<sup>ニ</sup> 船<sup>フネ</sup> 臣<sup>シン</sup> 臣<sup>シン</sup> 順<sup>ジュン</sup>   臣<sup>シン</sup> 乱<sup>ミダ</sup> 璽<sup>ビニテ</sup> 命<sup>メイ</sup> 帝<sup>テイノ</sup> 天<sup>テン</sup>

祠<sup>コト</sup> 吾<sup>ワカ</sup> 至<sup>レ</sup> 旦<sup>ダン</sup> 摩<sup>マ</sup> 謹<sup>ツムシ</sup> 則<sup>トキニ</sup> 以<sup>シテ</sup> 斯<sup>コト</sup> 国<sup>コク</sup> 古<sup>コ</sup> 請<sup>ウケ</sup> 教<sup>ノリ</sup> 天<sup>テン</sup> 聞<sup>キ</sup> 古<sup>コ</sup> 代<sup>タイ</sup> 日<sup>コ</sup> 原<sup>ハラ</sup> 滿<sup>ミチ</sup> 原<sup>ハラニ</sup> 解<sup>トキ</sup>  
 禁<sup>キン</sup> 瀧<sup>ミ</sup> 爰<sup>コト</sup> 下<sup>ゲ</sup> 伽<sup>カ</sup> 感<sup>カン</sup> 盤<sup>ハ</sup> 問<sup>トウ</sup> 依<sup>レ</sup> 之<sup>ノ</sup> 对<sup>タテ</sup> 勅<sup>ク</sup> 房<sup>フサ</sup> 正<sup>メ</sup> 所<sup>シ</sup> 飾<sup>シカ</sup> 元<sup>ゲン</sup> 本<sup>ホン</sup> 播<sup>ハ</sup> 三<sup>サン</sup> 押<sup>ヲシ</sup> 放<sup>ハチ</sup>  
 裏<sup>リ</sup> 念<sup>子カヒヲ</sup> 唯<sup>タム</sup> 向<sup>カウシ</sup> 陀<sup>ダ</sup> 心<sup>シン</sup> 古<sup>コ</sup> 者<sup>モ</sup> 爲<sup>ノリ</sup> 面<sup>メン</sup> 面<sup>メン</sup> 余<sup>メイ</sup> 被<sup>ラレタリ</sup> 月<sup>ツキ</sup> 食<sup>シ</sup> 磨<sup>マ</sup> 正<sup>セウ</sup> 朝<sup>テウ</sup> 州<sup>シウ</sup> 十<sup>シ</sup> 浮<sup>ウカヒ</sup> 鱸<sup>ロ</sup>  
 販<sup>ハ</sup> 曰<sup>ウ</sup> 願<sup>子カヒヲ</sup> 幸<sup>サイハヒ</sup> 官<sup>カン</sup> 然<sup>ルニ</sup> 勅<sup>チヨク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 本<sup>ホン</sup> 々<sup>々</sup> 勅<sup>ノリ</sup> 番<sup>バン</sup> 仰<sup>ヲムセ</sup> 廿<sup>ニ</sup> 于<sup>トキ</sup> 着<sup>ツ</sup> 帝<sup>テイ</sup> 仁<sup>ニ</sup> 飾<sup>シカ</sup> 有<sup>ウ</sup> 順<sup>カセ</sup> 繩<sup>ツ子ヲ</sup>  
 盤<sup>ハ</sup> 教<sup>ノリ</sup> 以<sup>ハ</sup> 欲<sup>ホッ</sup> 長<sup>ウ</sup> 吾<sup>ワレハ</sup> 荅<sup>タウ</sup> 教<sup>ノリ</sup> 朝<sup>テウ</sup> 奈<sup>ナ</sup> 祠<sup>コト</sup> 州<sup>シウ</sup> 勅<sup>チヨク</sup> 一<sup>イチ</sup> 時<sup>ニ</sup> 由<sup>ヨ</sup> 御<sup>ミ</sup> 王<sup>ワウ</sup> 磨<sup>マ</sup> 九<sup>キウ</sup> 風<sup>マニ</sup> 解<sup>トキ</sup>  
 古<sup>コ</sup> 房<sup>フサ</sup> 嵩<sup>ソウ</sup> 本<sup>ホン</sup> 去<sup>レ</sup> 是<sup>レ</sup> 曰<sup>ノタマフ</sup> 房<sup>フサ</sup> 禁<sup>キン</sup> 故<sup>ユエニ</sup> 演<sup>ノベテ</sup> 下<sup>ゲ</sup> 使<sup>シニ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 艱<sup>ヨウ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 字<sup>ウ</sup> 四<sup>シ</sup> 郡<sup>コホリニ</sup> 月<sup>ケツ</sup> 滯<sup>タム</sup> 放<sup>ハナセ</sup>  
 由<sup>ヨシヲ</sup> 兼<sup>ウケ</sup> 帝<sup>テイニ</sup> 朝<sup>テウ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 月<sup>クワツ</sup> 勅<sup>ク</sup> 謹<sup>ツムシ</sup> 絲<sup>シ</sup> 放<sup>ハ</sup> 曰<sup>ク</sup> 向<sup>カウ</sup> 教<sup>ノリ</sup> 山<sup>ヤマ</sup> 老<sup>ラウ</sup> 本<sup>ホン</sup> 然<sup>シカルニ</sup> 十<sup>シ</sup> 着<sup>ツキテ</sup> 以<sup>テ</sup> 漂<sup>ヨイ</sup> 大<sup>オ</sup>  
 奏<sup>ソウス</sup> 荅<sup>タウ</sup> 封<sup>フ</sup> 見<sup>ミント</sup> 辰<sup>シン</sup> 氏<sup>シ</sup> 問<sup>モン</sup> 白<sup>モウス</sup> 所<sup>ユエ</sup> 至<sup>レ</sup> 冀<sup>イ</sup> 盤<sup>ハ</sup> 房<sup>フサ</sup> 科<sup>シナ</sup> 二<sup>ニ</sup> 帝<sup>キミ</sup> 盤<sup>ハ</sup> 四<sup>シ</sup> 其<sup>ソノ</sup> 葦<sup>アシ</sup> 年<sup>トシ</sup> 海<sup>ウミ</sup>

部<sup>ブ</sup> 橘<sup>タチハナ</sup> 袖<sup>シウラ</sup> 鄙<sup>ヒナノ</sup> 帝<sup>キミ</sup> 請<sup>ウケ</sup> 正<sup>セウ</sup> 清<sup>キヨ</sup> 世<sup>セ</sup> 古<sup>コ</sup> 等<sup>ラ</sup> 東<sup>タウ</sup> 七<sup>チ</sup> 盤<sup>パン</sup> 帝<sup>テ</sup> 相<sup>タカ</sup> 御<sup>ミ</sup> 重<sup>アツシ</sup> 勅<sup>クノ</sup> 被<sup>サレタリ</sup> 迎<sup>カウ</sup> 帝<sup>キミ</sup>  
 少<sup>セウ</sup> 諸<sup>モロ</sup> 沁<sup>ヒタシ玉ヒ</sup> 里<sup>サトヘ</sup> 聞<sup>キコ</sup> 勅<sup>ラ</sup> 帝<sup>テイ</sup> 麻<sup>マ</sup> 玉<sup>タマ</sup> 聞<sup>キコ</sup> 祠<sup>ソ</sup> 下<sup>ゲ</sup> 大<sup>タイ</sup> 古<sup>ノ</sup> 造<sup>ツクリ</sup> 互<sup>イニ</sup> 幸<sup>カウシテ</sup> 志<sup>シ</sup> 心<sup>ム子ヲ</sup> 遣<sup>ツカワ</sup> 山<sup>ヤマ</sup> 聞<sup>キコシ</sup>  
 安<sup>ヤス</sup> 門<sup>カト</sup> 則<sup>トキニ</sup> 下<sup>カ</sup> 所<sup>シ</sup> 参<sup>サン</sup> 可<sup>ヘキ</sup> 呂<sup>ロ</sup> 惠<sup>エト</sup> 所<sup>シ</sup> 治<sup>ヘト</sup> 向<sup>カウシ</sup> 子<sup>シヲ</sup> 后<sup>キサキ</sup> 新<sup>シン</sup> 義<sup>ギ</sup> 則<sup>トキニ</sup> 勅<sup>ク</sup> 奏<sup>ソウス</sup> 資<sup>スケ</sup> 科<sup>シナ</sup> 所<sup>メ</sup>  
 重<sup>シケ</sup> 朝<sup>アツ</sup> 元<sup>ケン</sup> 向<sup>シ</sup> 食<sup>メシ</sup> 内<sup>ダイス</sup> 奏<sup>ソウス</sup> 被<sup>サレ</sup> 萬<sup>マン</sup> 之<sup>ノ</sup> 字<sup>ジ</sup> 以<sup>ヨリ</sup> 食<sup>メシ</sup> 鎮<sup>チン</sup> 社<sup>シャ</sup> 連<sup>ツ</sup> 盤<sup>パン</sup> 殿<sup>テン</sup> 式<sup>シキ</sup> 元<sup>ケン</sup> 使<sup>シト</sup> 盤<sup>パン</sup> 成<sup>ナリ</sup> 左<sup>サ</sup> 食<sup>シ</sup>  
 宮<sup>ミヤ</sup> 臣<sup>シン</sup> 正<sup>セウ</sup> 賜<sup>タマワシノヲ</sup> 盤<sup>パン</sup> 帝<sup>キミヘ</sup> 由<sup>ヨシヲ</sup> 召<sup>メ</sup> 御<sup>ミ</sup> 民<sup>タミヲ</sup> 見<sup>ミ</sup> 禮<sup>レ</sup> 古<sup>ニ</sup> 奉<sup>ル</sup> 治<sup>サマツテ</sup> 正<sup>セウ</sup> 共<sup>ニノ</sup> 古<sup>コ</sup> 飾<sup>シカ</sup> 中<sup>チュウ</sup> 重<sup>カサ子テ</sup>  
 崎<sup>サキ</sup> 岡<sup>ヲ</sup> 帝<sup>テイ</sup> 被<sup>ラレ</sup> 古<sup>コ</sup> 此<sup>コノ</sup> 曰<sup>ノウ</sup> 此<sup>コノ</sup> 荅<sup>コタエキ</sup> 心<sup>コムロニ</sup> 守<sup>シ</sup> 立<sup>タテ</sup> 自<sup>ヨリ</sup> 曰<sup>イハレ</sup> 遷<sup>ウツシ</sup> 後<sup>ノチ</sup> 帝<sup>テイ</sup> 而<sup>ニ</sup> 喜<sup>キ</sup> 廣<sup>マニ</sup> 將<sup>ゼウ</sup> 盤<sup>パン</sup>  
 中<sup>チュウ</sup> 本<sup>モト</sup> 家<sup>カ</sup> 感<sup>カンセ</sup> 后<sup>ミ</sup> 旨<sup>ム子</sup> 清<sup>キヨ</sup> 旨<sup>ム子</sup> 其<sup>ソノ</sup> 万<sup>マン</sup> 曰<sup>ノ玉ウ</sup> 大<sup>タイ</sup> 此<sup>コレ</sup> 吾<sup>アカ</sup> 且<sup>カツ</sup> 盤<sup>パン</sup> 對<sup>タイ</sup> 和<sup>ワ</sup> 味<sup>ミ</sup> 着<sup>ツキ</sup> 資<sup>スケ</sup> 古<sup>コ</sup>  
 將<sup>ゼウウ</sup> 民<sup>ミン</sup> 臣<sup>シン</sup> 御<sup>ギョ</sup> 庚<sup>ケイ</sup> 奏<sup>ソウス</sup> 士<sup>シ</sup> 元<sup>ゲン</sup> 時<sup>トキ</sup> 加<sup>カ</sup> 盤<sup>パン</sup> 子<sup>シ</sup> 関<sup>クワン</sup> 身<sup>ミ</sup> 亦<sup>マタ</sup> 古<sup>コ</sup> 襁<sup>フ</sup> 家<sup>カニ</sup> 大<sup>ハナハダ</sup> 迎<sup>カウ</sup> 成<sup>ナリヲ</sup> 為<sup>ニ</sup>

二ニ臣<sup>ヲ</sup>橘<sup>タチハナ</sup>臣<sup>ソ</sup>自<sup>ヨリ</sup>身<sup>ミ</sup>味<sup>ミ</sup>文<sup>ヲ</sup>麻<sup>マ</sup>神<sup>シ</sup>崇<sup>ソウ</sup>幸<sup>サイワヒ</sup>本<sup>ホン</sup>后<sup>ミヤ</sup>遣<sup>ユイ</sup>文<sup>フシニ</sup>式<sup>シキニ</sup>本<sup>ホン</sup>親<sup>カシ</sup>御<sup>ミ</sup>等<sup>ヲ</sup>藤<sup>フチ</sup>  
 天<sup>テ</sup>子<sup>シ</sup>召<sup>メ</sup>朝<sup>アツ</sup>清<sup>キヨ</sup>其<sup>ソレ</sup>此<sup>コノ</sup>大<sup>ハナハタ</sup>下<sup>タ</sup>呂<sup>ロニ</sup>坦<sup>ハニ</sup>艶<sup>レ</sup>以<sup>モツテ</sup>朝<sup>テウニ</sup>雖<sup>トモ</sup>音<sup>ケンヲ</sup>曰<sup>ク</sup>后<sup>コウ</sup>朝<sup>テウノ</sup>則<sup>ツキ</sup>供<sup>トモン</sup>盤<sup>シ</sup>原<sup>ハラノ</sup>  
 戊<sup>ツ</sup>午<sup>ノ</sup>連<sup>ッ</sup>臣<sup>ソ</sup>麻<sup>マ</sup>后<sup>ミヤ</sup>所<sup>トコロニ</sup>然<sup>シカウ</sup>向<sup>ス</sup>渡<sup>ワタシ</sup>安<sup>ヤスノ</sup>曲<sup>キク</sup>德<sup>トクラ</sup>深<sup>フカッシ</sup>月<sup>ツ</sup>贈<sup>ヲクル</sup>琴<sup>キン</sup>宮<sup>グウ</sup>官<sup>クワン</sup>亦<sup>マタ</sup>関<sup>クワン</sup>古<sup>コノ</sup>朝<sup>アツ</sup>  
 四順<sup>レ</sup>安<sup>ヤス</sup>呂<sup>ロ</sup>七<sup>チ</sup>住<sup>イマサン</sup>而<sup>ノ</sup>后<sup>ミヤニ</sup>賜<sup>タマウ</sup>尊<sup>ミコトム</sup>謚<sup>シラ</sup>依<sup>ヨツテ</sup>故<sup>ユヘ</sup>氏<sup>シノ</sup>天<sup>アマノ</sup>絲<sup>シ</sup>可<sup>レシ</sup>長<sup>チヤウタリ</sup>清<sup>キヨ</sup>東<sup>トウ</sup>后<sup>ミヤ</sup>臣<sup>ソ</sup>  
 月于<sup>トキ</sup>重<sup>シケ</sup>藤<sup>フチ</sup>大<sup>タ</sup>相<sup>タガ</sup>盤<sup>ハシ</sup>献<sup>マツル</sup>万<sup>マン</sup>則<sup>スナハチ</sup>号<sup>コウス</sup>念<sup>子カウ</sup>今<sup>イマ</sup>人<sup>ヒト</sup>豊<sup>トヨ</sup>既<sup>ステニ</sup>贈<sup>ヲクル</sup>然<sup>レハ</sup>万<sup>マン</sup>下<sup>タ</sup>七<sup>シ</sup>義<sup>ヨシ</sup>  
 下<sup>シモノ</sup>時<sup>トキ</sup>女<sup>メ</sup>原<sup>ハラノ</sup>子<sup>シ</sup>衣<sup>ヒニ</sup>古<sup>コ</sup>之<sup>コレヲ</sup>呂<sup>ロ</sup>勅<sup>ク</sup>率<sup>ソツ</sup>之<sup>コレヲ</sup>更<sup>サラニ</sup>大<sup>イニ</sup>媛<sup>ヒメノ</sup>紃<sup>ツルベ</sup>神<sup>カン</sup>則<sup>スナハチ</sup>呂<sup>ロニ</sup>向<sup>シ</sup>大<sup>タ</sup>教<sup>ノリ</sup>  
 旬<sup>トウカニ</sup>艮<sup>ヨウ</sup>其<sup>ソ</sup>義<sup>ヨシ</sup>大<sup>タ</sup>祠<sup>コト</sup>尊<sup>ミコト</sup>請<sup>ウケ</sup>文<sup>フシヲ</sup>土<sup>ツ</sup>宜<sup>ヨロシク</sup>東<sup>タウ</sup>古<sup>シエノ</sup>余<sup>ミコトラ</sup>明<sup>メイ</sup>名<sup>ナラ</sup>任<sup>マカセ</sup>曰<sup>ノク</sup>能<sup>ヨクシニ</sup>子<sup>コ</sup>召<sup>メサレ</sup>  
 帝<sup>テイ</sup>老<sup>ラウ</sup>外<sup>ホ</sup>教<sup>ノリ</sup>朝<sup>アツ</sup>乞<sup>コヒシ</sup>喜<sup>キ</sup>勅<sup>ク</sup>清<sup>キヨ</sup>明<sup>メイ</sup>加<sup>クワエ</sup>流<sup>ル</sup>縁<sup>エン</sup>此<sup>コノ</sup>德<sup>トクノ</sup>其<sup>ソノ</sup>禁<sup>キン</sup>吾<sup>ワレ</sup>奉<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>汝<sup>ナンヂ</sup>

忘<sup>ワスレ</sup>可<sup>レシ</sup>尊<sup>ニ</sup>母<sup>イロ</sup>可<sup>ベシト</sup>果<sup>ハタシ</sup>誠<sup>ニ</sup>奴<sup>ヌ</sup>尊<sup>ノ</sup>美<sup>マサ</sup>香<sup>カウ</sup>爲<sup>スレ</sup>清<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>清<sup>キヨ</sup>憶<sup>ラモヒシ</sup>賜<sup>タマヒ</sup>自<sup>ヨリ</sup>国<sup>ニ</sup>日<sup>ヲ</sup>自<sup>ヨリ</sup>都<sup>トラ</sup>  
 乞<sup>コヒノ</sup>則<sup>ツク</sup>可<sup>レシ</sup>尊<sup>ニ</sup>飽<sup>アキ</sup>既<sup>ステニ</sup>汝<sup>チカ</sup>荅<sup>テ</sup>□様<sup>シク</sup>煎<sup>セン</sup>問<sup>トウ</sup>万<sup>マン</sup>郷<sup>サトノ</sup>万<sup>マン</sup>賜<sup>タマウ</sup>其<sup>ソノ</sup>其<sup>ソノ</sup>望<sup>ノ</sup>六<sup>ロク</sup>浦<sup>ウラ</sup>後<sup>ウ</sup>□  
 面<sup>メン</sup>各<sup>ヲ</sup>則<sup>ツク</sup>清<sup>キ</sup>富<sup>トミ</sup>飽<sup>ア</sup>手<sup>タ</sup>飯<sup>イ</sup>此<sup>ノ</sup>薇<sup>ワラヒノ</sup>蔽<sup>バ</sup>時<sup>トキニ</sup>呂<sup>カ</sup>者<sup>モノカト</sup>呂<sup>ロ</sup>然<sup>ル</sup>節<sup>セツ</sup>容<sup>ヲ</sup>陀<sup>タノ</sup>月<sup>ツ</sup>催<sup>モヨラシ</sup>関<sup>クワン</sup>  
 々<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>亦<sup>マタ</sup>万<sup>マン</sup>郷<sup>サトノ</sup>也<sup>ヤ</sup>向<sup>ケル</sup>富<sup>トミ</sup>郷<sup>ト</sup>葉<sup>ハニテ</sup>菜<sup>ヲ</sup>茹<sup>クサカリ</sup>曰<sup>ク</sup>問<sup>キク</sup>見<sup>ミテ</sup>所<sup>ニ</sup>粮<sup>ロウ</sup>々<sup>ニ</sup>郡<sup>コホリニ</sup>初<sup>ハツ</sup>多<sup>タ</sup>東<sup>タウニ</sup>  
 分<sup>チ</sup>家<sup>カ</sup>義<sup>ヨシ</sup>呂<sup>ヲ</sup>号<sup>ガウス</sup>自<sup>レ</sup>穀<sup>クサ</sup>申<sup>ス</sup>名<sup>ナハト</sup>尊<sup>ミコトラ</sup>葉<sup>ハ</sup>人<sup>ウド</sup>汝<sup>チ</sup>奴<sup>ヤツコ</sup>之<sup>コレヲ</sup>草<sup>クサ</sup>穀<sup>コク</sup>野<sup>ノ</sup>着<sup>ツキ玉ウ</sup>午<sup>ウ</sup>船<sup>セン</sup>容<sup>ヲモ</sup>  
 賜<sup>タマウ</sup>臣<sup>シン</sup>教<sup>ノ</sup>召<sup>メサレ</sup>曰<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>物<sup>モノニテ</sup>也<sup>リ</sup>問<sup>トワ</sup>奉<sup>レ</sup>以<sup>タテマツル</sup>幸<sup>サイワヒ</sup>飯<sup>ハン</sup>此<sup>コノ</sup>問<sup>テ</sup>茹<sup>カル</sup>絶<sup>タヘ</sup>地<sup>チニ</sup>此<sup>コノ</sup>私<sup>シ</sup>曰<sup>ハク</sup>日<sup>ニ</sup>渡<sup>ト</sup>向<sup>ムキ玉ヒ</sup>  
 后<sup>ミヤハ</sup>相<sup>アイ</sup>二<sup>ニ</sup>汝<sup>チハ</sup>然<sup>シカウ</sup>郷<sup>ト</sup>餲<sup>カッ</sup>尊<sup>ノ</sup>食<sup>シ</sup>扇<sup>アウキ</sup>献<sup>タテマツル</sup>好<sup>コト</sup>不<sup>ス</sup>郷<sup>サトノ</sup>曰<sup>ク</sup>奴<sup>ヤツコ</sup>餲<sup>カッ</sup>爲<sup>セ</sup>上<sup>ノ</sup>海<sup>カイ</sup>勢<sup>セイ</sup>  
 安<sup>ス</sup>則<sup>ツケ</sup>媛<sup>ヒメニ</sup>姉<sup>アチ</sup>後<sup>ノチ</sup>名<sup>ナ</sup>食<sup>シイラ</sup>曰<sup>ク</sup>賜<sup>タマウ</sup>則<sup>トキニ</sup>奴<sup>コ</sup>麦<sup>ムキノ</sup>持<sup>モタ</sup>荅<sup>コト</sup>汝<sup>チ</sup>居<sup>ル</sup>食<sup>シイノ</sup>上<sup>ノ</sup>総<sup>ソウ</sup>追<sup>ヲツテ</sup>州<sup>シウヨリ</sup>

|                  |                  |                  |                   |                  |                  |                   |                    |                   |                   |                   |                   |                      |                   |                     |                 |                   |                  |                    |                    |                   |                  |
|------------------|------------------|------------------|-------------------|------------------|------------------|-------------------|--------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|----------------------|-------------------|---------------------|-----------------|-------------------|------------------|--------------------|--------------------|-------------------|------------------|
| □                | 子                | 十 <sup>シウ</sup>  | 十                 | 束 <sup>ソク</sup>  | 為 <sup>イ</sup>   | 等 <sup>ダチ</sup>   | 大 <sup>ハナハタシ</sup> | 神 <sup>カミヲ</sup>  | 念 <sup>子カヒノ</sup> | 之 <sup>ノ</sup>    | 御 <sup>ミ</sup>    | 所 <sup>ニ</sup>       | 字                 | 名 <sup>ナ</sup>      | 民               | 身 <sup>ミ</sup>    | 之 <sup>コレヲ</sup> | 造 <sup>ツクリニ</sup>  | 郷 <sup>サトノ</sup>   | 於 <sup>ヲ</sup>    | 重 <sup>ケラ</sup>  |
| 愁 <sup>シウ</sup>  | 家                | 三 <sup>ン</sup>   | 月                 | 果 <sup>ハテ</sup>  | 之 <sup>ノ</sup>   | 日 <sup>ニチ</sup>   | 賜 <sup>タマウ</sup>   | 納 <sup>ヲサムル</sup> | 神 <sup>シン</sup>   | 内 <sup>ナイ</sup>   | 母 <sup>イロタリ</sup> | 以 <sup>エン</sup>      | 訓 <sup>ヲ</sup>    | 可 <sup>ヘシ</sup>     | 守               | 此 <sup>ノ</sup>    | 然 <sup>ル</sup>   | 新 <sup>ニワナイノ</sup> | 庶 <sup>ショ</sup>    | 被 <sup>ラレニ</sup>  | 爲 <sup>メ</sup>   |
| 感 <sup>カンス</sup> | 臣                | 於 <sup>ヲ</sup>   | 一                 | 于 <sup>トキニ</sup> | 掟 <sup>ヲキテ</sup> | 夜 <sup>ヤニ</sup>   | 自 <sup>ヨリ</sup>    | 所 <sup>トコロト</sup> | 明 <sup>メイト</sup>  | 待 <sup>シ</sup>    | 殊 <sup>コトニ</sup>  | 奈 <sup>イカントナレハ</sup> | 考 <sup>カンカヘ</sup> | 号 <sup>ストノリ玉ウ</sup> | 護 <sup>セン</sup> | 郷 <sup>トニ</sup>   | 仁 <sup>ニ</sup>   | 小                  | 人 <sup>ジン</sup>    | 共 <sup>グ</sup>    | 先 <sup>サキト</sup> |
| 殊 <sup>コトニ</sup> | 女                | 神 <sup>カン</sup>  | 日 <sup>ニ</sup>    | 時                | 不 <sup>スレ</sup>  | 奉 <sup>ル</sup>    | 其 <sup>ソレ</sup>    | 謹 <sup>ンテ</sup>   | 玉 <sup>アラワレ</sup> | 所 <sup>トコロヲ</sup> | 此 <sup>ノ</sup>    | 后 <sup>ミヤハ</sup>     | 神 <sup>ン</sup>    | 勅 <sup>マ</sup>      | 間 <sup>マ</sup>  | 居 <sup>イマサン</sup> | 后 <sup>ミヤハ</sup> | 社 <sup>ホコラヲ</sup>  | 等 <sup>ラ</sup>     | 使 <sup>シセ</sup>   | 其 <sup>ソノ</sup>  |
| 此 <sup>ノ</sup>   | 官                | 宿 <sup>テ</sup>   | 間 <sup>ヘタテム</sup> | 天 <sup>テン</sup>  | 曲 <sup>タカワ</sup> | 親 <sup>カシツキ</sup> | 家 <sup>カ</sup>     | 言 <sup>モウス</sup>  | 賜 <sup>タマウ</sup>  | 納 <sup>サメン</sup>  | 鄙 <sup>ヒナ</sup>   | 后 <sup>ミヤハ</sup>     | 納 <sup>ト</sup>    | 安 <sup>ス</sup>      | 汝 <sup>チ</sup>  | 亦 <sup>マタ</sup>   | 安                | 尊 <sup>トラ</sup>    | 是 <sup>コレ</sup>    | 至 <sup>イタリヌ</sup> | 外 <sup>ホカノ</sup> |
| 所 <sup>ノ</sup>   | 此                | 崩 <sup>ホウ玉</sup> | 春 <sup>ヨ</sup>    | 平 <sup>ヒヤウ</sup> | 光 <sup>カウ</sup>  | 雖 <sup>トモ</sup>   | 臣 <sup>シン</sup>    | 后 <sup>キサキ</sup>  | 然                 | 且 <sup>カツ</sup>   | 里 <sup>サトニ</sup>  | 七 <sup>チ</sup>       | 号 <sup>ス</sup>    | 重 <sup>□</sup>      | 美 <sup>ヨク</sup> | 去 <sup>サツテ</sup>  | 重 <sup>ヲ</sup>   | 奉 <sup>レリ</sup>    | 者                  | 此 <sup>コノ</sup>   | 女                |
| 庶                | 所 <sup>ニ</sup>   | 七                | 炁 <sup>ワイ</sup>   | 二                | 陰 <sup>イン</sup>  | 然                 | 女                  | 喜 <sup>キ</sup>    | 爰 <sup>コユ</sup>   | 亦 <sup>マタ</sup>   | 神 <sup>ミ</sup>    | 大 <sup>イ</sup>       | 義 <sup>ギヲ</sup>   | 兼 <sup>ウケ</sup>     | 此 <sup>ノ</sup>  | 後 <sup>ノチ</sup>   | 召 <sup>メサレ</sup> | 遷 <sup>ウツシ</sup>   | 貴 <sup>トウト</sup>   | 所 <sup>トコロニ</sup> | 官 <sup>クワン</sup> |
| 人                | 集 <sup>ツトヒ</sup> | 大                | 六 <sup>リク</sup>   | 午 <sup>庚</sup>   | 約 <sup>ヤク</sup>  | 有 <sup>ウ</sup>    | 官 <sup>ン</sup>     | 色 <sup>シヨク</sup>  | 則 <sup>スナハチ</sup> | 追 <sup>マム</sup>   | 宝 <sup>タカラ</sup>  | 子 <sup>ノ</sup>       | 播 <sup>ホトコス</sup> | 勅 <sup>ヲ</sup>      | 郷 <sup>ト</sup>  | 鎮 <sup>ナガク</sup>  | 吾 <sup>アカ</sup>  | 貴 <sup>タツトブ</sup>  | 人 <sup>ヒトナリト</sup> | 此 <sup>ノ</sup>    | 等 <sup>ダチ</sup>  |

早 祭<sup>リハ</sup> 亦<sup>マタ</sup> 重<sup>アタメ</sup> 改<sup>ニ</sup> 后<sup>コウ</sup> 安<sup>、</sup> 遣<sup>ツイ</sup> 帝<sup>キミ</sup> 崩<sup>ハウ</sup> 聖<sup>セウ</sup> 上<sup>セウ</sup> 二 田<sup>ダ</sup> 内<sup>ダイ</sup> 斯<sup>コトニ</sup> 云<sup>イツム</sup> 化<sup>、</sup> 等<sup>ラ</sup>  
 后<sup>ミヤ</sup> 正<sup>、</sup> 難<sup>ガタント</sup> 五 宮 尊<sup>ト</sup> 音<sup>イン</sup> 聞<sup>キコ</sup> 去<sup>キヨ</sup> 武<sup>ム</sup> 洛<sup>ラク</sup> 天 出<sup>イツ</sup> 而<sup>ノ</sup> 奉<sup>ル</sup> 自<sup>ヨリ</sup> 如 悲<sup>カナシム</sup>  
 御 月 有<sup>アリ</sup> 位<sup>ラ</sup> 之 可<sup>レ</sup> 率 所<sup>シ</sup> 之<sup>ノ</sup> 帝<sup>テイヘ</sup> 其<sup>ソ</sup> 十 雲<sup>モト</sup> 此<sup>コ</sup> 葬<sup>ウシ</sup> 其<sup>ソレ</sup> 來<sup>イ</sup> 誠<sup>マコトニ</sup>  
 誕<sup>タシ</sup> 九 請<sup>ケ</sup> 被<sup>ラレ</sup> 可<sup>シ</sup> 号<sup>ス</sup> 土 食<sup>メシ</sup> 由<sup>ヨシラ</sup> 受<sup>ジュ</sup> 則<sup>トキ</sup> 一 云<sup>イウ</sup> 由<sup>ヨシラ</sup> 然<sup>シカウ</sup> 崇<sup>ソウ</sup> 入 是<sup>コレハ</sup>  
 生 日 勅<sup>ヲ</sup> 補<sup>フセ</sup> 奉<sup>ニル</sup> 曰<sup>ウ</sup> 大 吾<sup>アカ</sup> 聖 禪<sup>センシタマウ</sup> 元 月 者<sup>モノラ</sup> 奏<sup>ソウ</sup> 而<sup>ノ</sup> 豔<sup>カイラ</sup> 冢<sup>ジャク</sup> 之<sup>コレ</sup>  
 日<sup>タリ</sup> 之 下 四 廟<sup>ビヤウ</sup> 且<sup>カツ</sup> 明 父<sup>チュ</sup> 武 安<sup>ヤス</sup> 正 十 共<sup>グ</sup> 此<sup>コ</sup> 安<sup>ヤス</sup> 石<sup>セキ</sup> 之<sup>ノ</sup> 古<sup>イニ</sup>  
 縁 當 向<sup>ス</sup> 位<sup>ニ</sup> 室<sup>シツラ</sup> 亦<sup>マタ</sup> 神 尊<sup>ミコトノ</sup> 帝 重<sup>シケ</sup> 帝 二 天 所<sup>トコロ</sup> 重<sup>シケハ</sup> 室<sup>シツニ</sup> 床<sup>ユカトモ</sup> 代<sup>シヘ</sup>  
 起 社<sup>、</sup> 大<sup>ヘタ</sup> 安 守<sup>リ</sup> 汝<sup>チ</sup> 坦 任<sup>マカセ</sup> 奏<sup>ソウス</sup> 后<sup>ミヤ</sup> 代<sup>ヨラ</sup> 日 平 多<sup>タ</sup> 参<sup>サン</sup> 納<sup>ヲサメ</sup> 可<sup>ヘシ</sup> 應<sup>ヲウ</sup>

(率土神社所有文書)